町史とっておきの話 251

只見町から考える
日本の中世・近世村落の書物文化財

東洋大学講師
久野 俊彦

猿丸大夫の歌の秘説と山先巻物のまじない歌

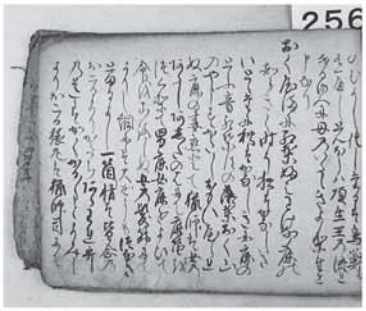
『百人一首』「奥山に」の秘説

歌を唱えてまじないを掛けることをウタヨミといいます。修験道のホウインはウタヨミをするために、和歌を習得し和歌書を持っていました。楢戸の龍蔵院に残る元禄十年（一六九七）『徒然藻塩草修行日記』には、『百人一首』の猿丸大夫の歌について、特異な解釈が記されています。

おくやまに　紅葉ふみわけ　なく鹿の　声きく時ぞ　秋はかなしき

いとどだに秋はかなしきに、鹿のとふ音、紅葉ばの落葉、おく山のやどすかたがた、おもひやられぬ。鹿の妻恋とて、猟師は女のあしあしだのはにて鹿笛をつくりて、男鹿、女鹿をよびて命をころしぬ。女の髪筋にてよりし綱には、大ぞうもつなぎとまるよし。一箇ノ情は、皆念のおこるより、かたちあらわれ、歌の道は、かくかるがるとよみしよりおこる。猿丸は猟師司にて、日光権現も猟師頼、赤城明神退治ましますなり。万事万三郎は猿丸の御末なり。大日本の嶽々知行したまふゆへに、霊仏山も皆々万三郎より大師々々もかりたまふなり。

猟けものを殺ス時にとなへて曰、「南無、無量寿学仏必外無別法必仏及衆生」ト唱エ申なり。是にて殺生の罪、亡び申よし。



▲「奥山に」の歌の秘説
（『徒然藻塩草修行日記』龍蔵院蔵）

ここでは「歌人猿丸大夫」は、日光権現を助けた「狩人猿丸」であり、この歌は、猟師が鹿笛を吹いて女鹿を呼びだして狩り殺す歌だといいます。この解釈は中世・近世の『百人一首』注釈書には見えませんので、秘説といっていいでしょう。ここには、野獣を成仏させる引導の呪文も付されており、「奥山に」の歌は野獣を弔い、獣霊を山ノ神に返す儀礼の歌となっています。これは狩猟伝承による和歌解釈です。このような独自の和歌解釈が修験者に伝授されて、この地方の知識と技芸として共有されていました。

狩人猿丸は、日光権現を助けて赤城明神を討ち狩猟守護神となったと『日光山縁起』に記されています。『日光山縁起』の諸本の一つには、猿丸が狩りをして「奥山に」の歌を詠む場面があり、歌人猿丸大夫と狩人猿丸が同一視されていました。その子孫という万事万三郎は、東北地方の狩人（マタギ）が所持した狩りの巻物『山立根本巻』に登場します。

ヤマサキ巻物での猿丸の歌

山ノ神を祀って祝詞を唱える人はヤマサキと呼ばれました。只見町黒谷の医家であった原田拓夫家に伝来した『山先由来根元』（文治五年〈二八九〉仮託）には、猿麿が日光権現を助けた説話が記された後に、

罪穢レ　サル丸カミト　祈ル身ハ
己ガ心ノ　ママニ狩猟

と記されています。猿丸の名に罪けがれが去る意味が掛けられ、山での殺生・伐採の罪を清める歌となっています。

また、慶応元年（一八六五）の祝詞『山神宮十二上神』（黒谷　菅家重喜家蔵）に、「奥山に」の歌があります。

山神宮　きんしょうさいはい　つつしみうやまって　きねんたてまつる　かけまくもかしこき山神　水神　当社十二神の　こう前にもうしもうさく　こいねがわくは　四海泰平　国家安全　山川安全　五穀成就　山川のかしょく　家業繁盛　村中安泰に守らせたまうと　おそれつ　しみ　うやまうす

猿丸太夫　奥山に　もみぢふみわけ　なく鹿のこゑきく　時ぞあきは　かなしき

山の安全を祈る祝詞を唱えた後に、「奥山に」の歌をウタヨミして、奥山での安全祈願をしています。和歌の解釈は多様に存在し、奥会津地方には山仕事の生活に根ざした和歌の秘説が伝承されていたのです。